

エッセイ、回顧録

アラビスト外交官の 39 年 第3回

塩尻 宏（中東調査会参与、元駐リビア日本国大使）

本文はアラビア語専門の外務省員として39年を過ごした著者の波乱にみちた経験を回顧したものであり、2012年8月28日から2013年10月1日まで29回にわたって「ASAHI 中東マガジン」に掲載された回顧録を、そのまま転載したものである。最初の記載からすでに9年間が経過しているが、日本と世界を取り巻く外交関係が混迷を極めている現在、外交の舞台で活躍を目指す若者や、最近の国際関係について学びたいと考える人々にとって、何らかのヒントになれば幸いである。

第3回 スーダン赴任 ナイル河畔のクーデター騒動

2012年09月11日

《エジプト：大使館員生活の始まり》

1969年6月には在エジプト大使館の領事担当に発令され、カイロでのアラビア語研修期間は実質1年10ヶ月でした。大使館と言えば政務班、経済班など任国政府との折衝や現地情勢についての情報収集を行うところと思われているようですが、その他にも領事班や文化・広報班などがあります。特に領事班は現地に滞在する日本人の方々の安全確保と生活上の便宜を図るのが仕事です。旅券の発給業務はもちろん、出生、結婚・離婚、死亡などに関わる戸籍事務や各種証明業務などを行う役場の出張所のようなところです。最近では国政選挙の投票所にもなります。また、訪日を希望する外国人への査証業務も領事班で担当しているのが通常ですので、領事・査証班とも呼ばれます。

総領事館には政府を代表する権能はありませんが、法律により定められた管轄区域内においては大使館から独立して領事・査証業務と共に海外における日本人の保護や活動支援を行っています。大使館や領事館などの在外公館では、重要な出来事や邦人が関係する事件・事故があれば休日はもとより深夜であっても直ちに対応しま

す。ある意味では、警察や消防の勤務形態に似ています。近年は国内世論を反映して、時間外勤務手当が支給されない在外公館においても国内官庁と同様に出勤・退庁時間のことさら一層厳格に管理することが求められています。後輩たちの勤務時間外の業務に対する士気が引き続き維持されるよう願っています。

さて、在エジプト日本国大使館で新米の領事担当として勤め始めた私は、前任者の例からして少なくとも2年ほどはエジプトで勤務するだろうと勝手に予想し、ベテランの現地職員(エジプト人)の助けを借りながら日々奮闘していました。ところが、実務に就いて2ヵ月後の1969年8月、カイロにやって来た家内から近々スーザンに転勤になる予定と聞かされました。私が日本を出る前から婚約していた彼女は、私の研修終了後に日本で婚姻届を出して家族として赴任してきました。エジプトでの生活を前提にして服装や生活用品を準備していた彼女は、出発直前に外務省に挨拶に出向いた際に突然「塩尻君は近くスーザンに転勤の予定です」と伝えられて戸惑った由です。一方で私は、気に入ったアパートをやっと探し出して家具を調えるなど、カイロでの新婚生活の準備を着々と進めていました。しかし、本人の知らないところで別の予定が立てられていたようです。

《スーザン：常夏の国へ》

予想に反してと言えば良いのか予定どおりと言えば良いのかは分かりませんが、1969年10月には在スーザン日本国大使館へ転勤発令となり、11月にハルツームに着きました。夜中に到着し、飛行機のタラップから降りて平屋のターミナルビルまで徒歩で行きました(もちろん当時ボーディング・ブリッジはありません)。その時にサウナに入ったような暑さを感じて、乗って来たジェット機のエンジンの熱気なのかと思ったのを覚えています。建物の中でもその熱気が続いていたので、赤道に近づいたことを実感しました。

後で聞いたところ、ハルツームの気候はhot, hotter, hottestしかなく、夏場の気温は50°Cを超えるとのことでした。やがて、実際に50°Cを超える戸外で呼吸をすると肺の中まで暑くなるのを実感しました。前任地カイロの冬場は朝夕の冷え込みが厳しくて暖房を使っていましたが、常夏のハルツームでは内外の温度差が大きいために2重の冷房が必要でした(建物全体を水冷式冷風装置で冷やした上で、各部屋の冷房機を稼動)。また、自動車は日陰に駐車していてもシートやハンドルは素手で触れないとほど熱くなります。ボンネットは目玉焼きができるのではないかと思うほどになりましたが、試したことはありませんでした。

当時のスーザンでは1969年5月の無血軍事クーデターによりヌメイリ(Gaafar Muhammed El-Numeiri)中佐(クーデター後少将に昇進)を革命指導評議会議長とする革命政権が成立していました。私が在スーザン日本国大使館に着任したのは、その半

年後の1969年11月でした。新政権の成立直後で政治的には緊張した状態が続いていた時期ですが、市民生活は輸入物資が欠乏していたことを除けば比較的平穏でした。

《スーダン：のどかなハルツーム》

スーダンの首都ハルツームは、白ナイル川と青ナイル川の合流点にあります。今では、人口も増え新しい建物も出来て首都圏の市街地は大きく変貌しているかも知れませんが、当時のハルツームは、合流する2つのナイル川と合流後のナイル河によって大統領府や政府機関が集まるハルツーム地区、新開地の北ハルツーム、旧市街区のオンムドルマン(Ommdorman)地区の3区域からなっていました。

19世紀後半から英國の霸権下にあったスーダンでは、マフディ(救世主)を名乗る宗教指導者ムハンマド・アフマド・マフディ(Muhammad Ahmad ibn Abdallah)が率いる勢力が、1885年にイギリス総督のゴードン(Charles Gordon)将軍が籠城する首都ハルトゥームを陥落させて、オンムドルマンを首都とするマフディ国家を樹立しました。その顛末は1966年に英國で製作された映画「カーツーム(Khartoum)」(Charlton Heston = ゴードン将軍、Laurence Olivier = マフディ)に描かれましたので、ご記憶の方も居られると思います。このマフディ国家は、西欧列強がアフリカを分割支配する時期に10数年にわたり独立を維持しましたが、1898年にエジプトから進攻したキッチナー(Horatio Kitchener)将軍が率いるイギリス遠征軍により滅亡しました。

着任後しばらくして引越し作業も落ち着くと、時間を見つけては現地の様子を見聞するため市内の各地に出かけていました。ナイル河を挟んでハルツームの対岸にある旧市街にあるオンムドルマンのスクでは、雑貨屋やみやげ物屋を覗いては主人らと雑談していました。かつての首都であったオンムドルマンは今では旧市街となっていますが、本来のスーダン社会のたたずまいを感じさせるところでした。物資は豊か



ハルツームの旧市街オンムドルマン(Ommdorman)にあるマフディ廟=1972年撮影

ではありませんでしたが、日常生活上の治安は安定していました。今では事情が変わっているかもしれません、当時は外国人が街中を出歩く際に不安を感じることはありませんでした。

ハルツームでは春先に白ナイルと青ナイルの合流点を眺めると、白っぽい流れの白ナイルと透明度のある青ナイルの流れとが出会う様子がはつきりと分かりました。土色に濁った白ナイルは、途中の支流から大量の土砂を含んだ水が流れ込むためとのことです。幾つかの資料によれば、ナイル河の年間総流水量(約800億トン)の60%



ハルツームのナイル河畔のどかな風景です。トラックを乗り入れて洗っている傍で子供たちが水浴びしています=1972年撮影

が青ナイル、30%が白ナイルからと推定されています。また、7月から9月にかけての増水期には青ナイルの流水量は渴水期の60倍(白ナイルは3倍程度)となり、合流後のナイル川では増水期の流水量は渴水期に比べて15倍に達するそうです。定期的な洪水により下流域の砂漠地帯で農業を可能にし、古代エジプト文明が繁栄したのは、まさに「ナイルの賜物」です。

現在は事情が変わっていると思われますが、私が在勤した40数年前には、合流点付近のナイルの河原では子供たちが水浴びしたり、トラックを浅瀬に乗入れて洗ったりするのどかな光景が普通に見られました。しかし、毎年2~3回はワニが出没することがあり、危険なためにそのつど警官が撃ち殺したとのニュースが現地新聞に載っていたことを覚えています。現地の人の話では、ワニは白ナイルを下って来ていたようです。ハルツームから車で1時間ほどの白ナイル上流のジャバロリア(Jabal Aulia)にはダムがあり、ワニはそこから下流には来られない筈でしたが、居眠りしていたのがダムから落ちてハルツームまで来るのだと、まことしやかに言われていました。

《スーダン：三日天下のクーデター事件》

私がスーダンに着任して1年半後の1971年7月にクーデター騒ぎが起き、ハルツーム市内で市街戦が行われる事態を経験することになります。革命指導評議会内部では以前から共産主義に傾倒するグループとヌメイリ議長らの民族主義派との路線

対立がありました。7月19日夜に容共派がクーデターを決行してヌメイリ議長らを拘束し、新たな革命評議会を組織する事件が発生しました。これに対して、ヌメイリ議長を支持する部隊が反撃し、7月22日までにはクーデターは制圧されました。首謀者は次々と処刑されて、新政権はまさに三日天下でした。しかし、その数日間はクーデター派と反クーデター派との間で武力抗争が続き、ハルツーム市内でも市街戦が行われました。日本大使館前の交差点でも何度か銃撃戦がありました。

このような騒乱が起きた場合に先ずやるべきことは、在留邦人の安否を確認し、騒乱の実情と今後の見通しを東京の外務省に電報で報告することです。30人ほどだったと記憶している在留邦人の無事は電話連絡により確認できましたが、今と違って当時は、その報告をローマ字文に打ち直して電報局に持つて行く必要がありました。窓から飛び込んでくるかもしれない流れ弾を避けるために大使館事務所の中で壁を背にして床に座り、ポータブル型の英文タイプライターを膝の上に乗せて、本省への報告電報を作成しました。その後、市街戦が収まった頃を見計らって、現地職員が運転する館用車でナイル河畔にある電報局まで恐る恐る出かけたのを覚えています。

意外と何事もなく電報局から戻って来られたので、もう少し市内の様子を確認しようと思い、現地職員の運転手と一緒にゆっくりとした速度で主要道路を走ってみました。路上は静まり返って全く人影がなく、張り詰めた空気の中を大統領府の近くまで来た時、突然耳をつんざくような轟音がきました。一



帰国前に後任者らをハルツームのナイル河畔に案内しているところ=1972年撮影

瞬何が起きたのか分からぬまま、自分たちが無事なのに安堵して周囲を見渡すと大統領府の堀の内側から薄紫色の煙が立ち上っていました。大統領府の中では未だ抗争が終息していなかった様で、戦車砲か何かの攻撃があったのかもしれません。

自宅にいる妻と未だ乳児だった長男のことは気になっていましたが、張りつめた空気の大統領館で必要な作業に専心し、気が付けば夕刻になっていました。仕事も一段落したので現地職員らにも帰宅するように言って、私も自分の車を運転して帰宅することしました。夏場で未だ明るい時間でしたが、通い慣れた道路はいつもとは違って

人通りが絶え、異様な感じでした。いつものスピードで進んで湾曲したところ抜けた途端に、道路上に数名の人影があり、よく見ると幾人かは私の車の方に向けて銃を構えていました。政権側かクーデター派なのかは分かりませんが、検問を行っているようでした。

スピードを落として近付くと、銃口を向けられたままスーダン訛りのアラビア語で「お前は何者か?」、「どこへ行く?」と聞かれました。「私は日本の外交官で、大使館での仕事を終えて自宅に帰るところだ。」とアラビア語で説明すると、彼らは銃口を下げて顎を振って「行け」というような仕草をして私を解放しました。スーダン訛りのアラビア語しか話さない彼らと話が通じなかつたらひと騒動になるところでした。あの頃のことを思い返すと今でも冷や汗を感じますが、在外公館に勤める外務省員の仕事はまさに命懸けのこともあるのを再認識させられます。(続く)